

9. 乳幼児の歯科保健管理に関する研究（総括報告）

分担研究者	榊原悠紀田郎
研究協力者	竹内 光春
	飯塚 喜一
	森本 基
	谷 宏
	矢崎 武
	中垣 晴男
	石井 拓男
	高山 陽子
	岩崎 浜子

1. 研究目標

幼児の歯科保健管理，とくにそのう蝕抑制のための集団に対する有効な管理方式を確立して，1才6カ月児歯科健康診査にもとづく管理の推進に寄与しようとするものである。

2. 研究の直接目的

- ① 市町村の行方乳幼児の歯科保健管理体制下において，その継続的管理の基盤となる諸事項を検討すること
- ② 乳幼児歯科保健管理を行う場合，指導をどんな時期に行うことがもっとも有効であるかを検討すること
- ③ 1才6カ月時点でのう蝕罹患の状態から，その将来の罹患性を有効に推定する手段を検討する
- ④ 僻地における乳幼児歯科保健管理をどんな風にすすめたらよいかを検討するための客観性をたかめる手段を検討する

これらの目的を果すために主として野外研究を行った。

3. 研究結果の概要

研究内容については，各テーマごとに研究協力者による報告があるが，その概要を示すと次のとおりである。

(1) 小都市における乳幼児歯科保健管理の経年的調査

人口45,000の尾張旭市においては，昭和42年から，市民健康センターに，1才6カ月児の歯科健診と指導および予防処置を行って，それを起点として半年ごとに同一対象について検診と指導を行ってきた。

これについて前報においては，そのうち，全経過管理群と，途中からの管理群とについて，う蝕管

理の効果を比較した。

今回は、同様な対象について、継続管理群を、

A群 1才6カ月時点から、管理をはじめて6才までの7回にすべて受検し、指導をうけたもの

A'群 1才6カ月時点で、管理をはじめたが、途中で欠落のあるもの

B～G群 2～6才時点でそれぞれ管理をはじめた群

B群……………2才

C群……………2才6カ月

D群……………3才

E群……………4才

F群……………5才

G群……………6才

とした。

以上の7群について、それぞれの6才時点でのう蝕罹患状態の比較及び年次推移を加味した比較を行った。

この場合、う蝕罹患状態の示標としてはう蝕罹患率、罹患ブロック数などを用いて比較した。

A群はいずれの示標についても、他の群に比べてう蝕予防効果の大きかったことをみとめた。

A群とA'群間にも効果の差異をみとめた。このことから管理を早期に開始し、かつ指導及び予防処置を受ける回数が多いほど効果の上ることが明らかとなった。更にこのことは近年になるほど強く表われて来ている傾向にあった。

また、1才6カ月時点でう蝕を持つものの約94%が6才時点で高度う蝕に罹患してしまっており、このことは、1才6カ月以降にう蝕に罹患した子供で6才時点で高度う蝕を持つものが約64%であることから、6才時点のう蝕罹患の状態は、1才6カ月時点の状態とかなり深い関係を持っていることが示唆された。

(2) 名古屋市内の某デパートで、6カ月間隔で、定期的に行われている乳幼児歯科保健管理事業について、継続的に管理下にある者について、前報においては、その管理の定着性について報告した。

今回は、昭和53年6月の4日間に来所した1022人中、3、4、5才児497人について、保健指導及び予防処置を受けた回数別に、歯垢沈着、歯口清掃習慣、間食習慣、甘味嗜好およびう蝕活動性試験の結果などを示標として、それぞれの指導の回数別の効果の差異の有無を検討した。また同時に年齢差による検討も行った。

資料の細部は別報のとおりであるが、保健指導の回数の影響は、歯口沈着の程度及び歯口清掃状況という。どちらかと言えば手技的な面で強く現われることが認められた。

これに対し、間食回数や甘味嗜好というような生活習慣に根差した事柄では保健指導の影響は明らかでなく、指導回数大きさにあまり左右されることはなかった。

しかし、歯口清掃、歯垢沈着とともに間食習慣や甘味嗜好の面も年齢が高くなるにつれて、歯科的に良好な状態となる傾向がみとめられた。

(3) 1才6カ月児歯科健康診査のとき、そのう蝕罹患状態から、将来のう蝕進行を予測できれば、保健指導上にも保健管理上にもきわめて、有用であると考えられるが、その手段はなるべく客観性が高く、しかも現症の中で比較的簡単に把握できるものでなければならない。

前報においては $\begin{array}{c|c|c|c} A & B & AB & BA \\ \hline A & B & AB & BA \end{array}$ という組合せについて、1才6カ月時のその状態が、3才時点の全体のう蝕罹患状態とどのような関係にあるか、いかにすると、どの状態が将来の状態の予測の

示標として有用であるかを検討し、 $\frac{BA}{BA} | \frac{AB}{AB}$ の状態がそれのもっともよく示標であり得ることを推定し得た。

今回はそれを応用して、予測性についてたしかめを行ない、1才6カ月児にその部位にう蝕のなかったことは、あまり予測性には役立たないが、う蝕をもっているものではかなり高い確度で予測し得ることをつきとめ、これと従来行われているOABC型との比較を行った。

(4) 無歯科医地区である北海道上磯群木古内町における1才6カ月児歯科健診について、昭和50年からつづいて指導及び予防処置をうけたものについて、その効果を他地区と比較し、その効果をみるとめ、僻地における1才6カ月児歯科健診指導の1つのパターンを追及を行った。

(5) 1才6カ月児歯科健診では、う蝕罹患状態は、肉眼的診査によって把握するものであるが、複数回の診査結果をより正確なものにし、また客観性を増加し、補助的な手段の導入により、歯科保健管理体系における歯科衛生士の役割をより充実する手がかりとしたいとして検討した。

以上の研究によって、1才6カ月児歯科健康診査を基点とする継続的保健管理体系を確立するに必要と思われる各種の条件の基礎を充実しようとしたものである。

1. 小都市における乳幼児歯科保健管理の経年調査 その2

榊原 悠紀田郎

中垣 晴男

石井 拓男

岩崎 浜子

高山 陽子

昨年に引き続き尾張旭市で行っている乳幼児歯科保健管理の予後追及を行った。

目 的

同市の乳幼児は1才6カ月、2才、2才6カ月、3才の4回は市民健康センターで、4才、5才、6才の3回は市営保育所で合計7回歯科のな予防処置と指導を受ける機会がある。

今回は①早期に管理を開始した子供と開始の遅れた子供とでは管理効果に差が生ずるか、②同様に予防処置、指導を受けた回数と効果との関係、の2つを知るため、昭和43年7月～47年6月生の4,104人のうち7回目(6才)の診査を受けた子供1,362人を対象とし検討した。(図-1)

方 法

1. 対象児を管理開始年令別に次のように分類した。

A群：1才6カ月に管理開始し7回全部出席したもの

A'群：1才6カ月に管理開始で途中欠席したもの

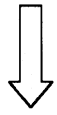
B～G群：2才～6才の間に管理を開始した群

2. 口腔内の状況を次のように分類した。

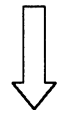
ch：高度のう蝕を持つもの

cmt：既に喪失、処置歯、初期う蝕を持つもの

cなし：う蝕のないもの



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 研究目標

幼児の歯科保健管理,とくにそのう蝕抑制のための集団に対する有効な管理方式を確率して,1才6カ月児歯科健康診査にもとづく管理の推進に寄与しようとするものである。